

4月1日から授業がやっと始まった。本来は4月ではなく、もっと早いのだが、昨年は教員・学生双方の数カ月のストのため授業が終わるのが遅くなり、それに伴って今年の新学期も開始がかなり遅れてしまったようだ。しかし、知人に聞いた話では、他の学部の場合、2月から授業が始まったというところもあり、必ずしも大学全体で統一して行うという訳ではなさそうだ。

1月1週目に後期の授業が終わり、その後試験に入った。3月初めまで試験は続いたが、教員は自分の試験科目だけ採点すればよいので、かなり時間的な余裕があった。私の場合は2月・3月は3回か4回程度顔を出すだけで、他の日は自由だったので、キャンディとゴールに出かけてみた。この旅行のことは別の機会に譲るとして、今回はスリランカの正月のことについて書いてみたいと思う。

スリランカでは正月は2回あると言ってもよい。1月1日の万国共通の正月と4月13・14日のシンハラ・タミル正月の2回祝われる。

1月1日は学校も商店も休みではなく、通常通り行われていて、あまり正月という感じはしない。せいぜい商店の飾りやテレビのコマーシャル等でそれらしい雰囲気を感じる程度である。私の勤務先では授業の合間に先生方が持参した手作りのお菓子などをテーブルの上に広げて、皆でそれを食べながら「新年おめでとう」とか「今年もよろしく」等と挨拶を交わし、後は雑談をして30分ほどで解散という具合である。

しかし、4月13・14日のシンハラ・タミル正月は大々的に祝われる。地元のキリバットゴダの商店街では1週間前あたりから正月セールが行われ、大きな買い物袋を手にした買い物客でごったがえしている。友人の話では、郷里に帰るのにお土産をたくさん買い込んだという。その上、大きな店では連日スピーカーで音楽や宣伝が流され、それが普段は静かな住宅地まで聞こえてきて、うるさくてしょうがない。日本の年末セール時期と全く同じである。

またシンハラ・タミル正月では、大学は正月の前夜を含めて、4日間休みであるが、私の場合は今学期授業がある日が月、金、土曜日なので、今回の正月休みは8日から19日までの12日間休みとなった。しかし、

8日から10日までは通常の授業は行われていて他の先生方は授業を行っていたので、この間は私にとってはあまり休みという感じはしなかった。

「正月には自宅に来ませんか」という招待を3人の友人たちから受けていたが、2人は比較的近いのでお招きを受けて出かけたが、もう一人はかなり遠いところで、残念ながら行くことは出来なかった。ともあれ、このような機会でなければ、スリランカの正月を体験することは出来ないのも、大いに興味があった。

一人の友人はアーティストといい、キリバットゴダから1時間ほどのところに住む男性で、そこまでバスで出かけた。初めてのところなのでバスで出かけるのに不安であったが、なんとか行くことが出来、友人とも再会できた。彼はロシアとイギリスに留学した経験があり、地元の議会で9年間議員を務め、地元では人望を集めた人物である。3日間彼の家に滞在し、のんびり過ごすことが出来たが、ただ期待していた正月らしき雰囲気は感じられなかった。スリランカ全土で正月のお祝いの様子がテレビでも報道されているのにどうして友人宅では正月を祝わないのか不思議であった。尋ねてみると、彼の家はクリスチャンなので、このシンハラ・タミル正月は祝わないとのことだった。彼が住む地域もほぼ全家族クリスチャンで、彼の村には教会は2つあっても仏教寺院はなかった。

シンハラ・タミル正月の新年の行事は仏教徒とヒンズー教徒のためのもので、イスラム教徒は別な時に祝い、クリスチャンは1月1日を新年として祝うそうで、それぞれ異なり、全く予想外であった。しかしながら、せっかく来たのだから料理だけでも正月らしいものを味わってほしいと奥さんが腕をふるってくれた。写真①がその正月料理である。

日本で正月料理は普通の時でも食べることは可能であるが、スリランカでもそれは同じで、これまでも目にしたことも食べたこともあった。写真の食べ物は、右から「キリバッド」、「オイルケーキ」、「フリタラパ」で、正月の定番的な食べ物である。

キリバッドは別名「ミルクライス」と言い、このミルクは牛乳ではなく、ココナッツミルクのことで、このミルクで炊き上げたご飯のことである。オイルケーキ

は油で揚げた甘い菓子で、色が濃くてあまり食べたいとは思わない。ワリタラパは初めて味わったのでよく分からないが、これもかなり甘い菓子である。スリランカの菓子類は非常に甘く、とうてい1個でさえ食べ切れるものではない。彼らは甘いものが好きで、紅茶を飲むのにも砂糖をかなり入れ、そんなにたくさん入れて大丈夫かと思うほどである。しかも1日に何杯も飲むので、男女ともに肥満の人が多し。糖尿病を患っている人がかなりいるようだ。

友人宅で気がついたことが一つある。それは日本の正月の習慣と同じような「お年玉」をあげるということがある。私は家族の方々からかなりいただいてしまった。このような習慣があるのを知っていたら、お年玉の袋を用意しておくのだったが、本当に残念である。こちらでは紙袋等に入れて渡すのではなく、キンマという植物の葉に載せて渡すのである。このキンマはあらゆる行事の際に用いられていて、これまでもよく見かけたことがある。

ラタナヤカという名前の別の友人宅では、10人ほどの客が招かれ、共に正月を祝った。祝ったといっても、ただお酒やコーラを飲みながら長時間談笑した程度であるが、ラタナヤカのベルギーの友人2人もちょうどスリランカに来ていたので招かれていて、実は彼らとは10数年ぶりの再会となった。2人は私の事を覚えていなかったが、ラタナヤカを知り合うきっかけを作ったのが彼らなのである。たまたまあるホテルに滞在していた時、2人は私が日本人だと分かったと、彼らの友人であるラタナヤカを紹介し、ちょうど日本語を勉強していた彼と話す機会を得たのであった。

12時頃にラタナヤカの家に着き、それから延々と話したり、飲んだりして、結局昼ご飯を食べたのは4時を回っていた。ゆつくり味わう暇もなくなり、食事を終えれば、あわてて帰ることとなり、4時半近くに解散となった。それからバス停まで送ってもらい2時間ほどかけて帰宅し、7時には何とか帰り着くことが出来た。

(続く)



①友人宅での正月料理



②正月にお馴染みの太鼓の演奏



③ラタナヤカの家で出された食事



④村での豚の解体作業。小さく切り分けられて売りに出される。



⑤ラタナヤカの家でのパーティの様子。ベルギー人2人も招かれていた。